

連載

新・種を蒔く人

〈私説〉世紀の大プロジェクト ～豊川用水～

高崎 哲郎 (作家)

第11回「^{じゅいちろう}近藤寿市郎の提唱から半世紀、〈夢の水〉東三河・湖西を走る」

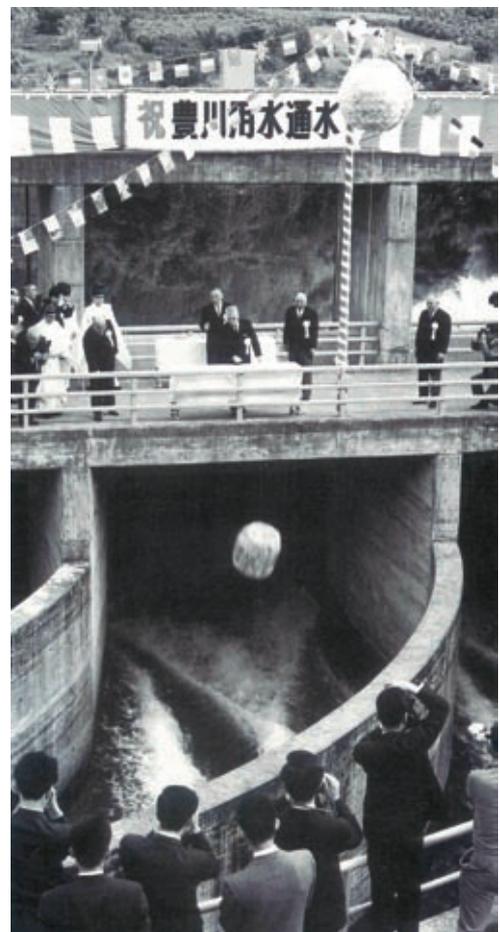
〈^{ステージ}舞台～19年かけて完成、〈夢の用水〉は豊かな農業を約束～〉

「豊川用水事業は愛知用水公団(現水資源機構)がさきに実施した愛知用水事業の組織と経験を高度に活用し、全力を傾注して完成したものであります。総合水利開発事業としては全国に冠たるものと確信しております。この地域は全国的に農業条件に恵まれており、農民も非常に熱心なので、今後この施設と恵まれた条件を十二分に活用され、農業近代化について、全国の規範になることを期待しています。愛知用水公団は水資源開発公団に統合されますが、今後ともその優れた技術を一層活用されるよう各位のご協力をお願いする次第です」

豊川用水・完工式典で農林大臣西村直己^{なおみ}は沈着な語り口調で祝辞を述べた。

完工式典は、昭和43年5月30日午前8時から、幹線水路の水の取入口である大野頭首工^{どうしゅこう}(愛知県南設楽郡鳳来町大野、以下市町村名は原則として当時のまま)での「通水の儀」で始まった。農林大臣西村直己、愛知用水公団理事長塩見友之助、愛知県知事桑原幹根^{みきね}、静岡県知事竹山祐太郎らが参列し、おごそかに神事が営まれた。すがすがしい山の朝である。ひとときわ濃くなった山の緑が影を落とす頭首工の水が出番を待つ。

理事長塩見と桑原・竹山の両知事が通水ボタンを力強く押した。豊かに蓄えられた水が、大音響と水しぶきを上げ生き物のように幹線水路に流れ込んだ。続いて農林大臣西村が、こも



豊川用水完工式 (『豊川用水』より)

第11回 「^{じゅいちろう}近藤寿市郎の提唱から半世紀、<夢の水>東三河・湖西を走る」

かぶりの二斗酒樽を水路に放った。頭上では、クス玉がこの時とばかりにパッと割れた。地元の農民や子どもたちなど見守る人々から拍手とともに、歓声がわき上がった。「万歳、万歳」のどよめきが、静寂な宇連川^{うれ}沿いの山間の空気を震わせ、祝いの酒樽は激しい流れに浮き沈みしながら下流へ流れた。

難工事だった東部幹線水路の二川サイホン入口(豊橋市中原町)では、午前10時半から竣工記念碑の除幕式が行われた。農林大臣西村が、碑を覆っていた白い布を引くと、高さ1.1メートル、長さ1.9メートルの黒御影石に刻まれた農相自筆の「豊川用水記念碑」の7文字が初夏の陽光を受けて浮かび上がった。

午前11時から、舞台を豊橋市民体育館に移して竣工式と祝賀会が、関係者約1300人が参列して開催された。愛知用水公団理事長塩見友之助は挨拶の中で「昭和36年9月、愛知用水公団がこの総合開発事業を引き継ぎ、その建設に努めてきましたが、着工以来19年にして完成しました。長い道のりでしたが、<夢の用水>が実現を見たわけで、誠に感慨深いものがあります」と述べて目尻を涙で光らせた。

続いて、愛知県知事桑原幹根が登壇した。

「この地方には水源が乏しく、干害の恐れに長年さらされて来ました。そのため農業をはじめ、関係する産業が発展を阻害され極めて不完全な状態でした。この状態を打開するため地元先覚者たちが努力されましたが、先の戦争の余波を受けて進展しませんでした。建設にかかってからは集中豪雨など種々の悪条件が重なりましたが、最高の技術と機械で完成にこぎ着けました。この用水は中部圏開発のカナメの一つになるものと確信しています。ここに建設工事で犠牲となられた21柱^{みたま}の御霊の御冥福をお祈りいたします」

(注：豊川用水の工事に伴う死者は16人とされる)。

静岡県知事竹山は「水に困っている静岡県の湖西地方が農業用水、工業用水の恩恵を受けるわけで地元に取りましては大きな喜びであります」と感謝の言葉を述べた。豊川用水の水は県境を超えて静岡県湖西町(現市)にも流れて行く。春から精を出して作った農作物が、日照りが続くと収穫が半減以下になるという惨状は過去の話になるのである。同時に、生活用水が断水する不安も解消されるのである。

(以下、『豊川用水史』、『豊川用水』(通水25周年記念誌)、『豊

橋市百年史』(豊橋市刊)、『愛知県の歴史』、愛知大学中部地方産業研究所論文、中日新聞などの関連記事を参考にする)

「広がる地平線」

豊川用水は愛知用水と並んで愛知県内における世紀の大水利事業であり、愛知用水を手掛けた愛知用水公団に引き継がれた後、東西幹線水路総延長111.7キロなどの工事が急ピッチで進められた。宇連ダム着工から19年目にあたる昭和43年5月に完成した。総工費は当初の予想を大幅に上回り488億円に上った。

豊川用水は干ばつに悩んできた農民に新時代にふさわしい



電照菊の栽培(『豊川用水』より)



農業経営への挑戦と勇気を与えた。渥美半島を苦しめて来た干害による被害も豊川用水によって解消され、米の生産量も飛躍的に増えた。豊橋周辺の農家では湿田から乾田への転換がおこなわれ、稲の種苗も銀河・トワダ・農林 17 号などの早植えのものへと変わっていった。豊川用水の恩恵を受ける農業地帯では、メロン・スイカ・電照菊などの施設園芸が急激に増え、土地生産性は大きく伸びた。また畑作の露地栽培でも豊川用水によって適地適作の幅が広がり、キャベツ・白菜・大根・トマトなど作付け品種が多岐にわたり年間を通して作られるようになった。(詳しくは後述)。

豊橋市における昭和 35 年度と 45 年度の農業粗収入を比較すると、米 91%、野菜 242%、畜産 311%と驚異的な伸びを示している。これらの増加は技術革新もあるが、豊川用水による効果といっても過言ではない。東三河地域のいたる所でスプリンクラーが水しぶきをあげている光景はそれを裏付けている。

同用水は、60 万人を越える東三河の人々の生活様式、三河港を中心にする臨海工業地域の工業用水として不可欠なものとなった。



豊川用水の完成に先だって、愛知大学中部地方産業研究所・研究員三好四郎は、同用水の渥美農業に与える影響を探るため現地調査を行い、調査結果をもとに論文「豊川用水地域の農業—とくに渥美農業について—」を発表した。豊川用水の通水によって、東三河地方の中でも渥美半島が全国屈指の農業地帯に変貌することを具体的数字に基づいて予見している。(昭和 41 年の調査の段階では、豊川用水は部分通水が始まっている)。同論文の「豊川用水地域の農業」から引用する。

「東三河地方は農業の立地条件に恵まれ、園芸、畜産を中心として 243 億円(昭和 41 年)の農業生産額をもつ全国的にも優れた農業地域である。この地域は、豊川用水の完成によって地域の主要農業地帯の耕地約 2 万 200 ヘクタールに対する給水体系が整備され、特に畑地^{かんがい}灌漑面積は 9800 ヘクタールとそのほぼ半ばを占め、畑地灌漑営農の進展が期待されている。この地域は山間部に広大な開発の余地が残されており、大規模草地改良事業、開拓パイロット事業、山村振興特別開発事業などによる開発が期待されている」

「昭和 35 年から 40 年の東三河地域の農業生産の伸びは、

県全体の 148%に対して 185%に達しており、際立って大きな伸びを示している。このような飛躍的な農業生産伸長の背景には豊川用水事業(部分通水が始まっていた)ならびに関連土地改良事業による基盤整備と、農業構造改善事業、野菜生産出荷近代化事業などによる農業近代化施設の導入が行われていること、さらに、このためには、昭和 35 年から 40 年の 5 か年間に約 46 億円(豊川用水事業費を除く)の財政投融資が行われ、昭和 41 年から 45 年の間に約 51 億円の投資が計画され、現に着々進められていることを忘れてはならぬであろう」

「畑地灌漑、総面積の 62%を占める」

豊川用水は、通水によって既存の農耕地に水を供給したばかりではなく、これらの関連事業として新たに開田・開畑が進められ、耕地は大きく拡大した。農村風景も一変した。用水の総受益地面積(昭和 40 年代後半)は、1 万 6829.2 ヘクタール(牟呂用水、松原用水を除く)で、そのうち畑地灌漑面積が 1 万 506.9 ヘクタールを占め、総面積の実に 62.5%に達する。(渥美半島 3 町平均では 67.5%に上る)。愛知用水の畑地灌漑面積が 15%であることを考えると、同用水がいかに畑地灌漑主体の用水であるかがわかる。水^{みずま}撒きのスプリンクラーが大活躍するのである。

豊川用水は、農業用水という観点だけに限ったとしても極めて総合的な特色を持っていることに注目したい。それは従来の農業用水のように水田の灌漑に資するのみのものではないことを上げることができる。広く畑地灌漑にも寄与する点が著しい特色となっている。畑地灌漑が大規模に計画された戦後初の事業は愛知用水であるが、用水地域では豊川用水に比べると、面積は少なく、所期の目的(農業用水)が十分に実現されたかどうかは議論の余地があろう。豊川用水では用水供給のための事業のみならず開墾による耕地の造成(土地区画整理事業)も実施され、基盤整備や構造改善事業さらには営農指導も組織だっで行われた。従って、同用水の農業分野に果たした役割は多角的であると共に、その価値は極めて高い。とりわけ、畑地農業の進展に貢献した意義は、日本における、これまでのどの用水よりも大きい。(『豊川用水史』より一部引用する)。

第11回 「^{じゅいちろう}近藤寿市郎の提唱から半世紀、<夢の水>東三河・湖西を走る」



広報映画「農業とかがい用水」(東映製作)

「農業生産と所得の増加」

東三河地域では、高度な商品生産を目的とする近代的営農が展開し、野菜・花卉^{かき}それに果実など、それぞれの主要産地が形成された。酪農をはじめ養豚・養鶏がさかんにおこなわれ、土地と労働のいずれにおいても高い生産性が実現されている。

さらに豊川用水における畑作農業の中心となる渥美郡と同郡内3町(旧田原・赤羽根・渥美町、現田原市)の生産所得を、全国、東海3県(静岡・愛知・三重の各県)、愛知県、東三河地域と対比しながら、通水前(昭和40年)と通水後(昭和46年)についてみると、渥美郡と同郡内3町は、通水前にすでに全国、東海3県、愛知県のいずれよりも、土地生産性のもとより労働生産性においても上回っていた。通水後は一層大きく引き離して高い数値を示している。平均して2倍強に増えている。農家1戸あたりの農業生産所得の通水前後における推移を、

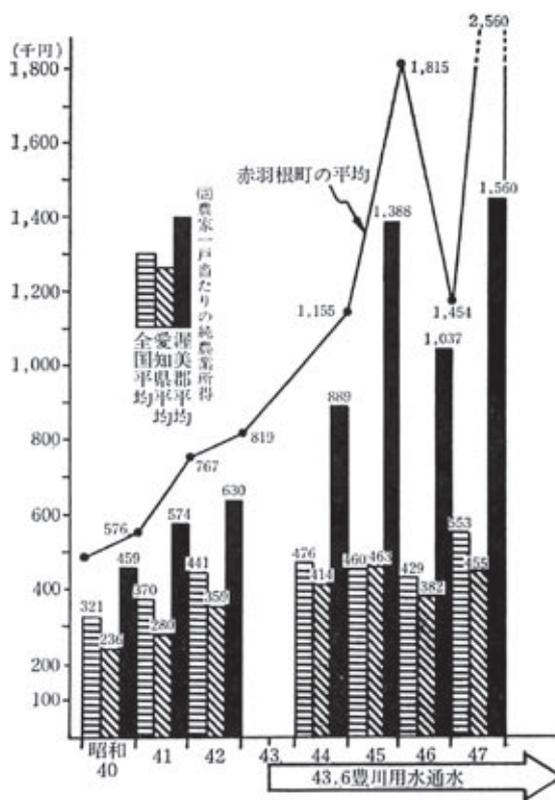
渥美郡と赤羽根町(現田原市赤羽根)とについて、愛知県および全国と対比しながら示した図である。これによると、渥美郡とくに赤羽根町の1戸当たりの農業所得が愛知県や全国平均よりもはるかに高い(年によっては5倍以上)ことがわかる。高い生産性の実現は豊川用水の通水によっていることは附言する必要はないだろう。

通水前後の生産所得 (単位:千円)

地域	昭和40年				昭和46年			
	10a当たり 生産所得	全国を 100とした数 値	農業従事 者1人当 たり生産 所得	全国を 100とした数 値	10a当たり 生産所得	全国を 100とした数 値	農業従事 者1人当 たり生産 所得	全国を 100とした数 値
渥美郡	41	(136)	244	(121)	93	(238)	485	(151)
田原町	34	(113)	231	(114)	83	(212)	510	(159)
赤羽根町	51	(170)	260	(128)	130	(334)	617	(193)
渥美町	45	(150)	232	(115)	90	(231)	447	(140)
東三河地域	35	(116)	178	(88)	75	(192)	379	(118)
愛知県	31	(103)	163	(80)	55	(141)	331	(103)
東海3県	27	(90)	131	(65)	44	(113)	311	(97)
全国	30	(100)	202	(100)	39	(100)	320	(100)

(愛知県農林水産統計年報による)

(『豊川用水史』より)



通水前後における農業生産所得(農家1戸あたり)の推移(愛知県農林水産統計年報による)

(『豊川用水史』より)



「商品性の高い農作物」

豊川用水の通水後は広く大規模な灌漑が展開された。その効果は、干害の防止に役立って生産性が安定したことにとどまらない。用水は農業上でも多目的に利用され、畑地灌漑と結び付いた生産技術の進歩と営農の高度化とによって、その生産は著しく増強されるとともに畑地農業構造の改善が促進された。同用水の通水により、自由な水利用が可能になった。天候に左右されることなく、適地適作が行われ合理的な作付け体系が樹立された。この結果、一方においては従前の自給自足的色彩の濃かった冬作の麦類、夏作の雑穀それにサツマイモなどに代わって、商品性の高い冬作のキャベツ(かつてはカンランと呼ばれた)、ハクサイ、ダイコンおよび花卉など(ダイコンはその後姿を消す)、夏作のトマト、キュウリ、メロンおよびスイカなどの栽培が行われた。他方においては、種まき、収穫の時期の調節によって、農家の苛酷な労働ピークの解消や一時的な価格変動に対する抵抗力が生れた。「豊作貧乏」は死語に近くなった。

これらの作物の種まき、植付け、肥培(肥料を与えて作物を育てること)などに用水が利用されるため収穫量は増加し、最低で1.5倍、最高で3倍もの増収が認められる。そのみならず、生産物の品質の向上と均一化が促進されている。



農業生産における用水効果について、具体例を見てみる。種まき作物(ダイコン、ハクサイ、スイートコーン、落花生など)では、発芽ぞろいがよく、かつてのようなまき直しの必要がなくなった。苗移植作物(キャベツ、トマト、ウリ類、タバコ、花卉など)では、育苗日数が少なく丈夫な苗が得られ、仮植の必要がなく、定植後の活着率が極めて良好で、補植の手間がかからない。永年作物(ミカン、カキなど)では、幼木の生長が早く、また果実の肥大効果が著しい。さらには台風時の塩害除去や冬場の乾燥と霜害の予防ができるので、次年の作柄が良好になった。

「労働力の軽減」

用水は植物の育成に利用されるのは当然としても、耕作作業(トラクターなどの耕起作業用水)、肥培管理(液肥施用用水、

土壤消毒用水の他、灌漑施設による肥料散布および灌水による適期施肥)、病虫害防除(薬剤用水の他、散水による薬液の土壌への封じ込め、害虫を溺死させるための貯留法灌漑)、収穫作業(ダイコンなどの抜き取り作業用)、施設園芸用水(冷暖房用水、土壌改良用水など)に使用され、農家の労力の削減や労働時間の短縮に大きな成果を上げている。

従来耕地とはならなかった条件の悪い土地でも、用水の利用によって飼料作物などの作付けが可能となり、その結果、畜産と水田、野菜園芸あるいは施設園芸との複合経営が進められているところもある。

こうして全国有数の畑作農業の主産地が生れた。主産地としてまず上げられるのが、豊橋市南部から渥美半島にかけての野菜の露地栽培であろう。ここでは冬作にキャベツ、ハクサイ、ダイコン、夏作にスイカ、スイートコーン、トマト、キュウリ(後にオオバ)の栽培が卓越する。一方、渥美半島を中心とした施設園芸(温室栽培)は特筆するに値する。ここではメロン、トマト、キュウリそれに花卉類、中でも温室栽培の電照菊の生産は全国に知られている。夜間に輝く温室群は不夜城を思わせ壮観である。

さらに蒲郡市では、温暖な気候を利用してミカンの栽培が大きな成果を上げている。この地のミカン畑は冬場の季節風を避けるため山すその傾斜面と南西側の丘陵に階段状に開かれている。豊橋市北部から豊川市に及ぶ地域では全国有数のカキの産地となっている。



このような畑地農業の発展は、この地域が温暖な気候や東京・大阪ならびに名古屋方面の大市場への輸送の利便に恵まれ、同時に国や県が基盤整備の援助をするとともに生産技術や営農面で適切な指導を行った結果と言える。何よりも、この

農家1戸当たり平均経営耕地面積の推移

(単位：a)

市郡名	昭和32年				39				46			
	計	田	畑	樹園	計	田	畑	樹園	計	田	畑	樹園
豊橋市	83	38	39	6	92	41	44	7	94	44	42	8
渥美郡	87	33	51	3	94	36	54	4	100	38	57	5

(『豊川用水史』より)

第11回 「^{じゅいちろう}近藤寿市郎の提唱から半世紀、<夢の水>東三河・湖西を走る」

地域の農民が生産意欲に燃えていたことによるものである。それは豊川用水の通水を前提として初めて実現したのである。この地域での経営耕地面積は1.5ヘクタール、特に2.0ヘクタール以上の農家が増加しており、農家1戸当たり平均経営耕地面積は、豊橋市や渥美郡(現田原市)でも昭和32年以降広くなり続けている。(昭和40年代後半の統計による)。

この東三河地域では専業農家が比較的多く、後継者難や後継者不足で悩む農家も少ないという。工業化と都市化の波の中で、日本の農業は停滞し場合によっては衰退しかねない状況が続いているが、この地域では従来の農業の持続にとどまらず、発展の動向さえ見てとれるのである。

「水道水と工業用水」

豊川の水は^{やはぎがわ}矢作川や木曾川に比べて水質の点で恵まれており、豊川用水から供給される水は同用水通水時の汚染された井戸水に比べると、はるかに良質である。豊橋・豊川および蒲郡の3市は愛知用水公団から資金の供給を受けて、各市で水道用施設を建設し、豊橋市では昭和42年(1967)から、豊川と蒲郡の両市では43年から豊川用水の水が供給された。45年4月、愛知県営の東三河水道用水供給事業が発足し、これ

らの施設の移管を受けて、水道用水の給水を始めた。その後46年7月から小坂井町(現豊川市)、48年4月から音羽町(現豊川市)、同年7月から^{しんしろ}新城市、8月から一宮町(現豊川市)にそれぞれ給水を開始し、48年の給水総量は約2479万立方メートルに達した。これは完工式が行われた43年の実質量の2.27倍に当たる。

これによって、東三河地域の各市町の水道用水は充足した。その後における人口の増加や生活水準の向上などにもなって用水の不足する恐れは残された。これに対処するために、第2の豊川用水と言われる豊川総合用水事業計画の早期着工が期待された。同計画では豊川水系の中小河川の開発を推進し、区域内の限られた水資源を有効に利用して生み出された水を農業・水道・工業用水など多方面に活用するものである。

東三河地区が工業地域として発展するためにも、水質の良い豊川用水のもつ意義は極めて大きい。臨海部の工場立地では第3次愛知県新地方計画によって臨海地区の埋め立て予定地(4158ヘクタール)に工場群が進出する計画であった。

工業用水は豊川用水からの東三河工業用水道第2期事業として、昭和60年までに日量12万8000立方メートルが予定された。この地域での工業化が促進されるに従って、工業用水源として豊川用水の演じる役割は確実に大きくなる。

<付録> 名作『水の歌』を読む

山田もと著『水の歌』(小峰書店、昭和56年(1981)8月刊行)は、豊川用水をテーマにした児童文学の傑作である。作者の山田さん(故人)は田原町(現田原市)在住で、小学校に勤務した経験を持つようである。主人公は75歳の「おしまおばあちゃん」である。作品は、渥美半島の村落が舞台となっている。老婆の東三河方言での独白(モノローグ)を中核にした物語で、「あとがき」には「このお話は名前を別にしてほとんどがほんとうのことです」とある。

第1章のタイトルは「豊川用水」で、本文は「『豊川用水がくるげな。』というわさがひろまったのは、昭和32年ごろだったかや。」とのおばあちゃんの独白で始まる。おばあちゃんはずぶやく。





「豊川は愛知県で、1、2を争うほどの大きな川だげえな。愛知県の奥の奥の、長野県や静岡県の境、北設楽郡の山また山の中から流れ出てきて、南設楽郡だ新城だ豊川だと、長い道のりを流れるほどに大きくなって、豊橋までくる間には舟でもものぼりおりできるほどの大きな川になって三河湾に流れこんどる。

この豊川の水を、わたしの渥美半島へ、いや、このあたりだけじゃない、豊橋、豊川、新城、蒲郡一带まで引いてこようという、今んまでにない大工事だげえな。水路の長さだけでも600キロ、わしゃ、600キロがどれだけやら知らんけれど、ともかくどえらいものを作るだけえな。」

おばあちゃんは豊川用水事業になかなか精通している。

「水がきてくれることうれしい。豊川用水はありがたいと思うんだけど、またいっぽうじゃあ、わしのかわいがってきた畑がなくなる。むかしの景色もなくなる。赤土ばかりの広ばんばがどうしてもなじめんだのう。」

「自分の年を考えると、75—、ようまあ生きてきたもんだと思うよ。いくら待っても(豊川用水の)水は流れてこん。

『まあ、帰らあに。』

わしが、ほうようにして歩き出したら、修二(息子)がきた。

『おばあさん、こんあところになにしてるだん。』

『水がくるていうで、見いきただけだのう。』

『そうだ、そうだ。まあ出るかな。』

修二は畑の中へ行行って、太い棒杭のようなもののねじをまわした。

『それっ、出たぞい。』

白い、まっ白い水が、棒杭の中らびゅうびゅうふき出いて、あたりにとび散った。

『出たぞえ、水が・・・水が・・・』

わしゃ、思わず立ちあがって走り出さあとしたら、土くれにけちまずいてころんでしまった。それでも両手を地べたについて、ひざではって、水をめがけてはい進んだ。まっ白くとび散った水がちいと静まると、すきとおった水になって、だあだあ音をたてて畑の中に流れていく。はしゃいどった赤土がみるみる色を変えていく。

わしゃはいづって、やっと水のとこまでくると、両手を水の中に入れた。ごしごしもんでみた。顔を洗った。手ですくって飲んでみた。

『けっこい水だのう。』

わしゃ、流れ出る水の中へ手をいれたなりで、動けんぞえ。水はわしの手を、フナがつつつくようになぶりながら赤土の畑へしみこんでいっだぞえ。

ああ—この水をおとつあんにも見せてやりたかった。」

「水の一滴は血の一滴」との宿命を背負って生きて来た老婆の胸を打つ情景である。豊川用水の威力に驚くおばあちゃんは、水の大切さに対する自戒も忘れない。

「ああ、ああ、水にもうしわけがたつように使やあ、どんねに使ってもわしゃええと思うけど、ただ流し捨てるなあもったいないぞえ。一ひねりせるだけですぐとまるだもの。

『わかった、わかったよ、おばあちゃん。メーターなんかついとやせんで、使っても使わんでも同じ料金だがね。おばあちゃんも、若い時のうさ晴らしに、思いっきりふんだんに水を使ってみたらどう。』

順子(息子の嫁)さんはそういうんだけど、わしのように水をおがむようにして使ってきたもんにやあ、とてももったいなくて、こや、銭金のことじゃあないだ。どうしても、流し捨てるなんということはできんだぞえ。

水は魔物だといってのう。水が怒るとおそがいもんだぞえ。日照りも大水も、ひとごとじゃあないに。」

豪雨に襲われたおばあちゃんは叫ぶ。

「ああ、泣いといでるだ。天が、地が、木が。身もだえといでるだ。痛くて、痛くて・・・。」

豊川用水から畑に水が流れて来たのを見ておばあちゃんは断言する。

「(豊川用水)こりゃあ百姓の夜明けになるずらよ。」

ラストシーンは強い感動が胸に迫る。スプリンクラーの水でみごとな虹が現出した時、おばあちゃんの目前に故人の義父母や夫の姿がよみがえる。おばあちゃんは最後に独りごとを吐く。「わしゃ、正気のもどったけど、畑の上にかかる虹を、いつまでもながめとったぞえ。」

方言がふんだんに出てきて理解しにくい箇所もある。だが方言がむしろ、おしまおばあちゃんの人柄をはじめ作品全般の地方色(ローカルカラー)を際立たせている。地元在住の女流文学者でなければ活写できないローカル文学の名作である。『水の歌』は『大地の歌』でもあることを教えるのである。

(つづく)

<歴史散歩>

がまごおり

蒲郡市、平安の代表的歌人・国司藤原俊成が 開いた景勝地 ～豊川用水の通水で全国有数のミカンの郷に～

ふじわらのしゅんげい

グラビア
とよがわようすい
豊川用水
toyogawa Canal



蒲郡市

(弘法山(こうぼうやま)からの眺めと麓のミカン畑)
三河湾を望む蒲郡市、全国有数のミカンの生産地、四つの温泉(三谷、蒲郡、形原、西浦)が軒を並べる観光地。漁船のロープ製造から全国一のロープ工業地域への発展も遂げている。

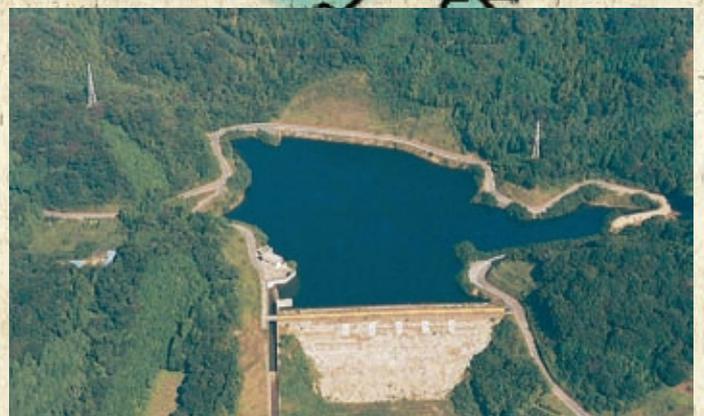


藤原俊成卿像
(竹島海岸)
平安末期の代表的歌人・藤原俊成(藤原定家の父)が、三河国司に任命(1145～49年)された折り、蒲郡の眺望を気に入り、荒地の多かったこの地を開発して「蒲郡開発の祖」と称えられる。



竹島(たけしま)

三河湾に浮かぶ竹島、祀られる八百富(やおとみ)神社は、藤原俊成が琵琶湖の竹生島(ちくぶじま)より勧請(かんじょう・神の分霊を請じ迎えまつこと)したとされる。春の竹島海岸付近は、潮干狩りの観光客で賑わいをみせる。



(左) 雨乞いの聖山のお血様(ひじりやまのおさらさま)、(右) 蒲郡調整池

かつて蒲郡市は、水に困窮して度々の雨乞い神事が行われ(写真左：タニシを供えて雨乞いをした岩)、多くの溜池を水源としていた。昭和43年の豊川用水通水により、水利が向上(豊川用水への依存：100%)したことで、安定した市民生活と産業発展へと大きく繋がった。写真右の蒲郡調整池(平成13年度完成)は、水のさらなる安定供給のため、既存の豊岡池を拡張して豊川用水から水を導入できる調整池に生まれ変わり、効用を發揮している。